

シリーズ3、富山で育つ宿根草の組み合わせとデザイン②

職藝学院

教授 渡邊 美保子

サルビア・ネモローサ

サルビア・ネモローサは、ヨーロッパ原産の寒さに強いシソ科の宿根草です。日当たりと水はけの良い所を好み、乾燥にも良く耐えます。草丈は50cm前後で、5月から6月にかけて開花します。原種の花の色は青紫色です。お天道様に向かって光を浴びている時の姿は、薄い花弁に日差しが透けてピカピカ光っているように見えます。ここ数年は、さまざまな色の園芸品種が流通するようになりました。園芸品種の花の色には、白、桃紫色、濃い紫色などがあります。品種は一年ごとに株が小さくなり、知らぬ間に消えてゆくものが多いのですが、原種は、それより寿命が長いのでお得感があります。

サルビア・ネモローサの花茎には、びっしりと小さな小花が付きます(写真1)。ラベンダーの草丈を半分にして小太りになったような草姿といいたいでしょうか。花の付く茎も深い紫色に染まります。小花は、1cm弱の間隔で茎をぐるりと一周するように5つか6つほど水平に並び、外向きに花を咲かせます。下から順に咲き始めて上へ上へと咲き進みます。先端まで咲き終わる頃には、一番下の段の最初に咲いた花には、ゴマ粒の半分ほどの大きさの黒くて丸い種ができています。花茎は咲き始めてから咲き終わるまで、倒れることなく、しゃきっと背筋を伸ばした貴婦人のような姿を保ちます。二番花を楽しむ場合は、6月中旬頃、咲き進んでいる花穂を葉の上で切りますと、その横から順番待ちをしている脇芽が2本伸びてきて、7月中旬頃また花を咲かせてくれます。株全体はおまんじゅうをつぶしたように少し横に広がります(写真2)。二番花たちは、咲きっぷりに気取りがなくてまるで別人のようです。人目を気にせず咲きたいように咲いて第二の人生を楽しんでいるようにも見えます。



写真2: 6月中旬に切り戻して7月中旬に再び開花したサルビア・ネモローサ。白い花はガウラ。

サルビア・ネモローサに何年も長く咲いてもらうコツは、完熟牛糞堆肥や有機質肥料を入れて土を作り、苗を秋に植えることです。秋から翌年の春にかけてじっくりと分解された有機物は、翌年動き出す新芽にタイミング良く吸収されます。そのため、充実した株に成長し、花の咲き具合や色が鮮やかになります。

サルビア・ネモローサは、青紫色の小花の付いた花茎が地面から何本も垂直に伸びて、群がっているように見えるため、花壇の手前に植えると目を引きます。一株よりも奇数株をグループで植栽すると、その後ろに配置する植物が引き立ちます。茎の曲線が柔らかく見えるガウラの品種や、その後ろに、ジギタリス、バーバスカム・ニグラムなどの直線の花茎を持つ宿根草を組み合わせると花壇全体に直線と曲線が混ざり合い美しく見えます(写真3)。



写真1: サルビア・ネモローサ 6月初旬



写真3: サルビア・ネモローサ (手前)。5月末。富山県総合運動公園